

国立国語研究所学術情報リポジトリ

世界の言語研究所（12） マックス・プランク心理
言語学研究所 （ドイツ，在オランダ）

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-03-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://repository.ninjal.ac.jp/records/2112

マックス・プランク心理言語学研究所

(ドイツ, 在オランダ)

喜多 壮太郎 (MPI for Psycholinguistics)

概要

マックス・プランク心理言語学研究所 (Max Planck Institute for Psycholinguistics) は、オランダのドイツ国境の町ナイメヘン (Nijmegen) にある。所在地はオランダであるが、ドイツの国立研究所である。物理学者マックス・プランクの名を冠した75の国立基礎研究所のうちのひとつで、ドイツ国外にある唯一のものである。75の研究所の研究内容は、歴史、ヨーロッパ法史、社会人類学等の人文・社会科学系のものから、宇宙物理、金属といった理工系のものまで、幅広いものとなっている。全ての研究所は、マックス・プランク協会 (Max Planck Society) という母体組織の傘下にあるが、各研究所はかなり独立に運営されている (何々省というような官僚組織には組み込まれていない)。

歴史とスタッフ

マックス・プランク心理言語学研究所の歴史は、その前身であるマックス・プランク心理言語学プロジェクト・グループが1977年に発足したことに始まる。3年間のテスト期間を経て、マックス・プランク協会の承認を得て、1980年に正式の研究所となった。現在4人のディレクター (Willem Levelt, Anne Cutler, Wolfgang Klein, Stephen Levinson) の下に、約25人の専任研究員、約20人の博士課程の大学院生 (マックス・プランク研究所自体は学位をだせないで、大学院生はおもにドイツかオランダの大学に席をおいている) が研究に携わっている。それに加え、常時10人前後の客員研究員が、おもに共同研究のために滞在している。したがって、言語の研究をしている人間が60人以上一堂に会していることになる。また、25人の技術者からなるテクニカル・グループが、コンピューターネットワークの管理といったことに留まらず、研究用のソフトウエアやハードウエアの開発をしたり、ビデオに収録されているものからコンピューター化されたものまで様々な言語資料の管理などにも携わっている。

組織

研究所の組織は、言語生成、言語理解、言語獲得、言語と認知の4部門にわかれている。各部門の長であるディレクター以外の研究者は、ごく少数を除き、1年から5年契約で仕事をしている。3年から5年ぐらいで、大学のポストに移り後進に道を譲るのが典型的であるため、常に研究の新陳代謝がおこなわれるようになっている。研究員は、欧米各国を中心に世界各国から来て

いるが（ちなみに日本人研究員は現在2人）、大学院生はオランダ人とドイツ人が大半である。

上記の4つの研究部門は、実験心理学、神経科学、理論言語学、人類学的言語学（フィールドワークに基づいた言語学）、コーパス分析などの多様なアプローチで、言語構造および言語行動を多角的に研究している。言語生成部門は、おもに単語や単文の生成を実験的に研究している。また、神経科学的手法による研究も行われている。言語理解部門は、音声認識、単語認識を乳幼児や大人がどのように行っているのかを実験的に研究している。また、比較言語学的な観点からの研究も行われている。言語獲得部門は、第一言語獲得と第二言語獲得の両方を実験的手法やコーパス分析などの手法を使って研究している。第一言語獲得の研究では、ツェルタル語（メキシコ）、タミル語（インド）など非ヨーロッパの言語の獲得研究にも力を入れている。また、アスペクト、数量子、項構造などに関する理論的分析も行っている。

言語と認知部門の研究

筆者の所属する言語と認知部門の研究について、若干詳しく説明することにする。この部門の研究の柱は、言語の多様性をフィールドワークに基づいた言語間の比較によって究明することである。比較は、意味論・語用論上の問題を中心に行なわれている。とくに、空間表現そして因果関係表現等を中心に、研究をすすめている（Ameka 1999; Bohnemeyer, 2000; Evans & Wilkins, 2000; Levinson in press; Senft 2000）。部門のメンバーの大部分は、ある特定の非ヨーロッパ言語の専門家である。これまでパプアニューギニア、メキシコを中心とする中米、西アフリカ、オーストラリア、東南アジアなどを含む世界全域で、フィールドワークを行なってきた。言語間の比較を最終目標とするフィールドワークのために、比較可能な言語資料を条件の違う各フィールドでどのように得るのかについての検討が絶えず行われている。さらに、言語の多様性が認知の多様性につながるのかという問題、すなわち我々の話す言葉が我々の非言語的思考に影響をあたえているのかということに関する研究も行われている（Pederson et al, 1998; Levinson, in press）。具体的には、諸言語の空間表現とそれらの言語を話す人々の空間認知の関連を調べている。言語と認知部門の第2の柱は、ジェスチャー研究である。発話に自然に伴うジェスチャーは、会話の流れの調整に重要な役割を果たすと同時に、必ずしも言葉には表されない話し手の思考内容を明らかにもしてくれる。このようなジェスチャーを研究することによって、文化、言語、思考、コミュニケーションの4つがどのようにからみ合っているのかを明らかにすることを目標としている（喜多2002; Kita; in press）。ジェスチャー研究でも、空間に関する記述に伴うジェスチャーの比較言語学的研究等に力をいれ（Kita & Özyürek, in press）、言語と認知の多様性の研究との関係をとっている。

研究所のホームページ（www.mpi.nl）には、より詳細な研究内容の紹介、ダウンロードできる年報（出版物一覧を含む）、テクニカル・グループの活動内容の紹介、各研究員の履歴や連絡先、外部の方も参加可能なイベントのお知らせ等が掲載されている。

文 献

- Ameka, Felix K. (1999). The typology and semantics of complex nominal duplication in Ewe. *Anthropological Linguistics* 41. 75-106.
- Bohnenmeyer, J. (2000). Event order in language and cognition. In H. de Hoop & T. van der Wouden (Eds.), *Linguistics in the Netherlands*, 17 (pp.1-16). Amsterdam: Benjamins.
- Evans, Nick & Wilkins, David (2000) In the mind's ear: the semantic extension of perception verbs in Australian languages. *Language* 76. 546-592.
- 喜多壮太郎 (2002) 『ジェスチャー：考えるからだ』金子書房
- Kita, Sotaro (Ed.) (in press). *Pointing: where language, culture, and cognition meet*. Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum.
- Kita, Sotaro, & Özyürek, Asli (in press). What does cross-linguistic variation in semantic coordination of speech and gesture reveal?: Evidence for an interface representation of spatial thinking and speaking. *Journal of Memory and Language*.
- Levinson, Stephen C. (in press), *Space in Language and cognition: Exploration of linguistic diversity*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Senft, Gunter (Ed.) (2000). *Systems of Nominal Classification*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Pederson, Eric, Danziger, Eve, Wilkins, David, Levinson, Stephen C., Kita, Sotaro, & Senft, Gunter (1998). Semantic typology and spatial conceptualization. *Language* 74. 557-589.